

夜が開けてきた。「疲れた。『タンゴ』と『カンナ』、一体何者なんだろう」と『マナ』はポツリと言った。その横で、『の』はすでに寝ていた。「お友達、お友達、『タンゴ』と『カンナ』……の』の』と一緒の居候……。それを聞きながら、『マナ』はちよつとゾクツとするものを感じた。「さて会社に行く準備でもするか。の』の』起きろ、朝だぞ」と言つて踏みつけた。「ミャー、ミャー。痛いな」と言つて、『の』も起き上がった。「猫飯。猫飯。今日も猫飯」と言いながら、台所に向かつて行った。

『マナ』が会社に出かけた後、『の』は『タンゴ』と『カンナ』が消えた部屋を、再び覗いてみた。そして「あそほ」と言った。しかし反応もなく、そして誰もいなかった。『の』はつまらなそうにその場を後にして、寢床に潜り込んだ。「うーん、良い気持ち。」「どん、どん。」「ドアを叩く音で、『の』は目を覚ました。『の』は、『タンゴ』、『カンナ』と尋ねながら、ドアを開けた。以外にも、そこには着飾った姫の姿があった。「汚い家ね。ここなのベンジヤミンのお家と言つたわ。ふーん。意外に中は広いのね」と言いながら、姫はスケスケと中に入ってきた。「どこが応接間。普通お客様が来たら、応接間に通すものでしょ。ほんとこの子は気が利かないわね。」「じじ」と言つて、姫はイスに座った。「あらパンコン。随分いいものを持っているのね。あなた使えるの」と、『の』に尋ねた。『の』は首を横に振つて、「これは『マナ』のなの」と答えた。『マナ』って誰なの、先日もそんなこと言つてたわね。まーいいわ。それよりドリンクはないの。こんな田舎まで来たんで、のどが渴いたわ。早く持つて来なさい」と言った。

